

日

本経済新聞に「生徒化進む大学生」のコラムが掲載されていた。学生と生徒の差は何かを、浅学を補填するために調べてみた。

学生と生徒に共通しているのは「生」である。「生」の語源は土から芽が出ることである。未熟な状態なので、成長中、そこから勉強中の意味に発展したようだ。「徒」は偏が道を、旁が歩くことを示し、道を歩く人たちを意味する。未熟な若者集団を教育することから、生徒と定義している。「学」の旧字は「學」で家の中で子が右手左手を使って色々な芸、作法等を真似することを意味する。

かつて「学生」は寺で修行する、官吏等の試験のため勉強している若者集団を指した。生徒と学生は、若者の集団でも受動的か能動的かに違いがある。英語では学生は'student'、生徒は'pupil'である。studentは、studyをする人から来た言葉で部屋に閉じこもってひたすら勉強、研究する若者を指す。Pupilはラテン語の'pupus'から発生した用語で未熟な子供集団を表している。東洋と西洋とで学生と生徒の定義の考え方がほぼ同じである。

昨今の大学を見ると、中等高等学校と教育状況が似ている。講義は一学期一六コマで構成され、毎回出席を取り、教員が休講すれば補講がある。授業の内容は学生に理解できるようにと、どの教員も丁寧に配布資料、パワーポイントを作成して説明する。マイクを使用して教室の隅々ま

各 人 各 説

「学生」の「生徒」化

早稲田大学 名誉教授

清宮 理

Osamu Kiyomiya



で聞こえるよう話す等も当たり前になっている。

学生の出席率は非常に高い。欠席が多い学生は授業開始の早い時期からチェックし本人への指導をするとともに親にも通知する。親子面談も今や多数の参加者があり、就職、学業、生活態度などの相談にのっている。二十歳を超えた学生の三者面談も生徒への対応である。大学での学生の勉強は、科目の目標を達成すれば所定単位をとって無事卒業できる。この合間にアルバイト、パソコンゲームに熱中し、就職の時期になれば、企業訪問、インターンシップに勉強・研究そっちのけで没頭する。海外留学、自主研究、現地に溶け込む旅行、部活、読書など、自ら人生を学ぶことを避ける傾向がある。

大学が学生に推奨しているのは資格取得や公務員採用試験などである。大学（文部科学省）の意向と学生のスポンサーである保証人の希望の最大公約数が、学生の生徒化であると言える。大学進学率が半数を超える時代で学生の生徒化は、高い学費（税金）に見合っただけの必然の気がする。

大学設立の当初の意義を考えると、複雑な気持ちになる。社会に出て指導的な立場に立つのに必要な、幅広い教養、自主的な学習意欲、未知への旺盛な探究心など、どう大学で教えるのが難しい課題である。真のエリートを教育する対象者と学生との定義が現状と乖離しているのか再考する時期に来ているのではないか。